

野ばらを産む苦しみ (其二)

吉 田 藤 吉

Leiden des Sängers von "Röslein" vor der Dichtung (II)

Tokichi YOSHIDA

凡ての人は結局自己の宗教を有つものである

ゲーテのライプツヒ——フランクフルト時代に於ける失意と重患からのLeidenの痛切な体験は、彼の所謂「遂に救主が私を——私の髪を掴んで——捉えました」と云う切実な啓示の内的体験となつたと共に、此内的体験を経てこそ、彼のLeidenからのheil werdenは、自然のHeilが神からのものであることを、彼をしてしみじみと自覚せしめたのであつた。つまり彼の此内的体験は、彼に於いては、神と自然と生命との渾然として融合した一連の宗教的自覚に他ならない。而して彼の此宗教的自覚こそは又彼の天才的自覚の前提たるものであり、やがて彼が、先輩ヘルデルにkongenialな共鳴を感じて、指向発展せしめられる前提たるものである。人々は往々にしてシュートラスブルグ時代のゲーテに与えたヘルデルの影響に驚界の眼を漫然と見張る前に、若きゲーテのライプツヒ——フランクフルト時代に体得した此宗教的自覚の意義を深く察知すべきであろう。若きゲーテは実に此自覚を以て、光り穏かなエルザスの町シュートラスブルグに第一歩を踏み入れることになつたのである。

ゲーテは、彼の自叙伝「我生活より」によれば¹⁾、1770年4月2日、シュートラスブルグに入り、旅館「ツーム・ガイスト」に一応笈を置くや直ちに、既に車中遙かに望み見た大伽藍の望楼に登り、其の屋上から、彼が或期間住むべき土地を眼前に眺めて、かくも美しい住まいの地をば彼のものとして定めてくれた運命を祝福する喜びを感じたのであるが、然し、この新しい土地の爽快な眺めには未だ筆のおろされない白紙に向うような快さと不安とがあつた。其処には、彼のかゝわる悲しみも喜びも印されてはおらず、明るい、色とりどりの平原は、彼に対して未だ口を噤み、只幾つかの目立つたものが彼の眼に留まつたのみで、愛好や情熱によつて、あれこれと取上げられる地点もなかつた。然しながら、若い心は、来るべきものの予感に早やざわめき、未だ満されない慾求は、来らんとするものが、吉凶何れにせよ、彼の住むべき此地方の色彩を帯びるであろうことを、心静かに待ち構えたのであつた。

ゲーテの、シュートラスブルグ最初の印象の此描写には、明るい色彩の内にも、予感する者の不安が窺われる。蓋し、郷里のマイン河畔の風光明媚に包まれつゝも、最早彼にとつては狭苦しい古巢である父の家に較べては、エルザスの光り穏かな美しさに包まれた自由な住まいには、心ひろがる思いもあつたに違いないが、然し、病漸く癒えたばかりで異郷の地に住まんとする彼には、未だ猶お自己の健康に対する不安と配慮もあつたであろうし、又嘗てのLeidenの体験から得た敬虔な心には、反省と自重を欠く筈もなかつたであろう。其故にこそ、彼が旅館ツーム・ガイストに笈を解くや、顧問官モーリッツ²⁾からの記念帖を開いた時、偶然にも、イザヤ書第54章2節の「汝の幕舎の

1) GOETHE: Aus meinem Leben, 2 Teil, 9. Buch.

2) {MORITZ, Legationsrat.
{GOETHE'S Brief an Katharina Elisabeth GOETHE,
1. Februar 1801.

内を広くし、汝の住まいの毛氈を拵げよ、吝むなかれ、汝の綱を長く延べ、汝の釘を固く打つべし。そは汝が右に左にひろがり出づべければなり」との言葉の記されてあるのを見て、それが衝動の励ましの意味に思えただけに、健康未だ定まらず、心既に敬虔な彼は複雑奇異の感に打たれたのであろう。然しながら、この聖句の複雑奇異の感も、彼はやがて身をもつて解いて行かなければならぬのである。

斯くの如くして始まる若きゲーテのシュトラスブルグ滞在初期の生活気分を知るためには、彼の晩年の記憶遙かな且つ修飾の取捨少からぬ自叙伝の外に、彼の当時の書翰に顧みることは真相を一層確認する上に役立つのであるが、此頃の彼の書翰が信仰の友に当てられたものが多い事は、真に興味深いことである。4月12日恰も復活祭の金曜日、先づ彼は、ライプツヒ時代の信仰の友リムプレヒトリ宛の手紙に、次の様に書いて居る。「僕は今再び学生となつて居ります。有難いことには、間に合うだけの健康もあり、元氣も充分です。而て今猶お昔の日の通りですが、神とその愛子イエス・キリストとの仲は和いで居ります」。又同じ月の19日には、「君が息災で説教を続けて居ると聞いて僕は嬉しく思います。君が其仕事に没頭しているのであれば、たとえ眼²⁾など無くとも、世の中を渡つて行けるに違いありません。デモクリートが、我と我が眼を抉つたのは、此危険な感官によつて気を散らされないためであつた、と私は聞いて居ります。……僕は盲も満更ではないと思います。他の人々が光を見る時、君が今も變らず昏れだけを見て居たとて、左して損失ではありませんまい。實際此世では一切が昏れなのですから、其の間多少の過不足があるだけで、その慰めもある訳です。僕は変りました。大いに變りました。これは神に感謝する次第です。ルツテルは「余は、余が罪を恐れるよりは、遙かに善行を恐れる。」と云いました。若い間は何処にも完全はありません。……此処に来て既に15日になります。シュトラスブルグは、僕が地上で知つて居る凡ての場所に較べて、何ら良くも悪くもないと僕は思います。つまり、非常に平々凡々です。それでも色々な面があつて、人を良くもし、悪くもして、日常の境遇を失わせることがあります。」

同じ月の29日彼は矢張りライプツヒ時代の敬虔な友ランゲル³⁾宛に次の様に書いて居る。「僕は今此の地にあつて、健やかで心和かな時にある様な、此上ない満足を感じて居ります。君の健康も望むらくは、もう大丈夫と云う所まで恢復して欲しいですね。僕達病弱者には特点があります。つまり僕達は全く健康な人より感じ易く、細やかで、或程度幸福です。肉体が患う時には、如何に麗しくも心は其の住いを捨てずに配慮を怠らないで居ることでしょう。心の慾望は殆んど一夜以上に及ぶこともなく、希望は挙げて新しく与えられる処方⁴⁾に懸つて居ます。親愛なるランゲル君。然も是が、肉体がしなやかで心のまゝになる時、僕達の肉体を操り人形の様に弄び、しばしば小娘の様に仮装舞踏会に幸福を求め、世間の鬱払いの中で安らいの代りに胸の高鳴りを、満足の代りに飢餓を持ち帰る、あの心に他ならないのです。……僕の小さな冒険は、つまり今では、池の面に降りそそぐ雨滴の様なものです。實際僕も、ひそやかな夕べの雨のそゝぐ池ほどにも、心騒ぎしては居りません。当地に来て三週間、僕の周囲は非常に騒然としています。でも此間猶お僕の学ぶべきものがあるので、当地に居ることに非常に満足です。……イタリーへ！ランゲル君！イタリーへ！但し明年と云う訳ではありません。私にはそれでは早すぎます。未だ必要な知識もありません。まだ未だ足らぬものが沢山あります。パリーが僕の予備校で、ローマが大学となるべきです。是こそ真の大学だからです。それを一度見さえすれば、全てを見た訳です。ですから僕も急いで出かけはしません。」

1) LIMPRECHT : Goethe : Aus meinem Leben 2. Teil

8. Buch.

2) LIMPRECHT は眼病を患つていた事を Goethe : Aus

meinem Leben 2. Teil 8. Buch にも書いてある。

3) LANGER : Goethe : Aus meinem Leben, 2. Teil

8. Buch.

扱て以上の手紙によれば、シュトラスブルグ時代初期の Goetheは、かのライプツヒ時代の無茶な冒険者ではなくて、己が冒険と比喩する所も精々池の面に降りそぐ雨滴の様なものに過ぎなくて、只敬虔と自重とを以つて将来に待ち望むものを日々の予感に持して居つた様に伺われる。自叙伝によれば、此頃の信仰のゲーテは、好きであつたフランス語の勉強のためにも、改革派のフランス人牧師の説教を聴くために好んで教会を訪れたり¹⁾ 或は第二次フランクフルト時代病床の彼を善く信仰に導いてくれた「美しき霊」のクレツテンベルグ嬢から留介された敬虔な人々に、進んで信仰の交りを求めたりしたのである²⁾ 茅野蕭々教授は其著「ゲョエテ研究」に於て³⁾ 「クレツテンベルグ嬢から紹介された多くの敬神家達とは余り往来しなかつたらしい」、と語つているが、然し此事は、ビイルショウスキーが其著「ゲーテ」に於いて⁴⁾ 「クレツテンベルグ嬢と病氣との影響で彼の心の内に込み込んだ、神を信ずる宗教的な、柔軟な気分を彼は猶お暫く持ち続ける。」と語つて居る様に、又木村謹治教授が其著「若きゲーテ研究」に於いて「ゲーテは、シュトラスブルグ市に來た頃はクレツテンベルグ嬢の紹介によつて、同市の篤信の人々に進んで近づき、交際を求めたのであつたが、やがて此人々から遠ざかる様になる⁵⁾。」と説いて居る様に、寧ろ過程的に解釈せらるべき事であろう。ゲーテに於いて特にそうである。

兎に角7月28日に於いてもゲーテは、臆病なパリサイ人の様な友人トラップが自己の一一の行為の可否に迷い、其判断をゲーテに求めて來たことに対して、返書の中に次の様な言葉を答へている⁶⁾。「其の様な事は、我々の才智や、分別や、熟慮や、或は無信仰などが、要するに其の名の如何を問はず、斯うしたものが、最も役に立たない事の一つです。かのエリーゼ⁷⁾の様に、至らない所のない神の叡知に全く信頼して、未来の全世界の運命をば駱駝を水飼う事⁸⁾に委ね得ない人は、真に渡し難い者です。此様な人に助言のしようもありません。と云うのは、神からの助言を欲しない人に、どうして助言することができましょう。……熟慮は安物で、反対に祈りは非常に有益な取引です。それは僕達が一人の主と呼ぶものの名に於いての唯一の沸騰であつて、是を僕達は結局僕達の主と呼ぶのです。そうあれば、僕達は無数のよい恵みを注がれる様になるのです。……僕は此様な気持を恐らく誰にも劣らず承知して居ります。僕にも、丁度現在の君の様に、世界が茨で満ちて居る様に思われた時期がありました。然し天上の医師が生命の炎を再び僕の内に強めて下されて、勇氣と欲びとが甦つたのです。」又同じドラップ宛の手紙の下書⁹⁾には「主なる神に較べては、私達は惨めなものにしか過ぎません。私達は言あげばかりしますが、神は実行するのです。永いこと選んで居ると、神は私達の腕を捉えて思いもかけなかつた第三の道を導き給うのです。……君は神を畏れると言いますが、それが正しく不幸なのです。神の遍在をば君は、まるで大選挙候が何時も君の身邊につき纏つて居るかの様に思つて、どうしても心を煩して居るのです。遍在的な愛の眞の感受を持つ事が出来るなら、そんなに思い煩うことはありますまい。」と書いて居る。

ゲーテの、神と自然と生命との一連の体験は、今や20才の彼に「神の至らない所のない叡智に対する信頼」と「遍在的な愛の眞の感受」と云う言葉を言い切るまでの心念の言葉になつたのである。然しながら、彼自らも「若い間は何処にも完全はありません。」と言つたように、20の年令は、人生に於て、何と言つても、未熟である。而も彼には、これ迄の彼の体験に窺えば、或る一つの重大

1) GOETHE : Aus meinen Leden, 3. Teil 11. Buch.

2) GOETHES Brief an Susanna Katharina von KLETTENBERG, 26. Augst 1770.

3) 茅野蕭々：ゲョエテ研究139頁。

4) BIELSCHOWSKY, Albert; GOETHE, bearbeitet von-walther LINDEN, s. 99.

5) 木村謹治：若きゲーテ研究改訂版157頁。

6) GOETHES Brief an TRAPP 28. Juli 1770.

7) } 第一モーゼ (創世記) 第24章。
8) }

9) ゲーテの草稿中から発見せられたもの。

なもの欠けて居つた。それは実に他の人に対する己が罪の体験と其の責任の自覚である¹⁾。然し彼が此の種の体験と自覚に入るには、デーモンが彼をして宮の頂きから身を下界に投げさせねばならない。

8月26日恰も彼の誕生日を二日前にして、彼はクレツテンベルグ嬢に宛てた手紙に次の様に書いている。「今日は、主の悩みと死とを思い起そうと思つてキリスト教の団体と一緒に出かけました。何故私が今日此午後に、こんなに遅ればせに、突然真面目になつて手紙を書こうとするのか、お解り下さることでしょう。……そもそも愛には精神の落着が必要で、私は散乱した気持よりも、寧ろ撒かれた護符を集めて見る方が益しとします。とりわけ私が現在ある状態ではそうです。」ゲーテはフランス人牧師の教会から遠ざかりつゝあつたと²⁾共に、他方に於いて、後にも述べる様に、学友達などとの親交に漸く歎びを見出しつゝあつたのであるが、それだけに、散乱し易い気持の中にあつて、主から遠ざかる不安と危険とを感じたことであつたろう。其の様な場合精神の落着を求めて、主の悩みと死とを思い起そうとして同信の集會を訪ね或は其集りと信仰の行を共にする事は、彼にあり得た事であらう。然しゲーテの此期待は裏切られたのである。而て彼は我慢が出来なくなつて次の様に書き続けなければならなかつたのであらう。「当地の敬虔家との交りは、決して長持ちするものではありません。初めの程は私も大いに彼等の相手になつたのですが、どうもそれでは不可ぬ様です。彼等の言う事は心から退屈で、性急な私には我慢が出来ません。けちな理解力を持合せた人ばかりで、初級の宗教感情や、尤もらしい考えでものを言い、而してそれで凡てだと思つて居るのです。つまりその他には何も知らないからなのです。……未だ付け加えることがあります。自分の感情や意見への偏受、即ち自分の鼻の向いた方にあらゆる人の鼻を向けようとする思い上り、是は優れた点のある人が、最も陥り易い欠点です。……明後日は私の誕生日です。此日から一新時期が始まると云う事は難しいでしょうけれども、兎に角、一切が御旨のままになることを私と共に、私のために祈つて下さい。」

恐らく此頃から、恰も1770年の誕生日の頃から、教会や同信の人々の集りの中に自分の信仰の養われる期待を放擲したのであらう。然し、一度び神に捉えられた啓示の内的体験を持つた者は信仰を放擲する事は出来ない。斯くて彼は自己の信仰が、神と自然と生命との渾然たる広い世界にこそ生きるものであることを益々自覚し且つ期待するのである。然し其の広い世界に於いては右に左にひろがり出なければならぬ。

若し君がそれを感じて居ないなら、
君はそれを会得出来ないだらう³⁾

ゲーテはシュトラスブルグに来て間もなく、ラウト姉妹の家で毎日食事をとる学生達の食卓仲間に加つた。此食卓仲間には、後見裁判所書記官で、寡婦や孤児達の世話役をして居た50才近い独身のザルツマンが座長格になつて居た。彼はシュトラスブルグ生れで、大学では法学を修めたのであつたが、哲学や美学にも関心を持ち、其の善良な人柄は、独身者であつただけに若々しい心と、純粹な理想とを持つて、よく学生達の気持を捉えて居つた。又彼の誠意と親切な人柄は、彼の余り高くもない地位にも懸らず、よく全市の人々の敬愛を受けて居つた。彼の指導して居つた食卓仲間の一人マイエルが彼に宛てた手紙⁴⁾のの中に「あなたの眼は未来に向けられて居ます。あなたの最大

1) GOETHE : Aus meinenn Leben : 3. Teil 12. Buch
にゲーテは「今度初めて罪は私にあつた」と語つて「私は最も美しい心を最も深く傷けた」と嘆いている。
2) GOETHE : Aus meinenn Leben : 3. Teil 9. Buch.

3) GOETHE : Faust 1. Teil Nacht.

4) MEYERS Brief an JOHANN DANIEL SALZMANN.
木村謹治著：若きゲーテ研究。104頁。

の慰めは、善事をなして然も屢々人々に知られずに居ることであることを、私は知っています。又あなたには、大衆の賛同喝采よりも、優しい者や、誠意ある者の涙が、一層好ましいものです。」と書いて居ることや、又ゲーテが既に述べた8月26日のクレツテンベルグ嬢宛の手紙¹⁾の後半に「彼は、悟性を以つて多くの経験を積んだ人であり、以前からの平静な心で世界を眺め、我等の此世に生れたのは、特に此世に有益であるためであつて、我等も亦宗教のなし得る働きに公献し得る。而して最も公献するものは、最も善きものである、と云うことを悟つた人であります。」と評して居ることなどは、真に彼の人物を証するものであろう。彼はゲーテの善良な心と優れた才能とを認めて、特にゲーテを愛した。ゲーテも亦彼の善意に信頼した。而してやがて二人の親密が増すに従つて、ゲーテは、全てをザルツマンにだけは打明けて相談する様になり、又ザルツマンも、よくゲーテの信頼に応えて、相談相手となり、ゲーテの法学の勉強に適当な復習講師を世話したり、ゲーテに相応しい社交の家庭を紹介したり、或は情熱的なゲーテの踏み迷う岐路に指標の様に立つたりすることにもなるのである。ゲーテがやがて、ゼーゼンハイムの牧師ブリオンの娘、かの野薔薇、フリーデリケ、との恋の重荷に苦しむ時、此ザルツマンこそ、ゲーテの苦しみの良き聴手ともなるのである。

恰も其の頃ザルツマンによつて、主として彼の食卓仲間を中心として、Gesellschaft der schönen Wissenschaft²⁾又はGesellschaft zur Ausbildung der deutschen Sprache³⁾と云われた集りが、組織せられ、毎週木曜日午後其の集りで、新刊の文芸書等が誦読せられたり又評論せられたりしたが、分けてもシエクシアが、興味ある話題となつた。然し、ザルツマンは、彼の下に於ける此集りが、やがてゲーテを旗頭とする新しい独逸文学運動の発祥地とならうとは、予期しなかつたであろう。ザルツマンが此集りに於て、「恩寵のはたらきに就いて」「愛に就て」、「復讐に就いて」或は「市民社会に於ける平等権に就いて」などの講演⁴⁾をなしたと云うことから推して、彼の思想的傾向の程は窺われる。彼は、倫理的哲学的神観の人であつたのである。また会員中には、貧困に生れ、幾度かの啓示に敬虔な信仰を持する純情の故に、ゲーテの深く同情を感じたシュテイリング⁵⁾も居つた。ゲーテは、前者の透徹した思想的根底と、後者の純情な信仰的態度との二つながらに、深く肯綮する喜びを有つことができたのであつた。

ゲーテは、初め好んで訪ねたフランス人牧師の教会からは、其フランス人牧師が、ゲーテのフランス語の語句の用法に対して、意地悪く非難することに慊気もさして、次第に遠ざかる様になりつゝあつた頃⁶⁾、又クレツテンベルグ嬢から紹介された敬虔家達にも、漸く我慢出来なくなりつゝあつた頃、其の他面に於いて、上述の様に、ラウト家の食卓仲間や、それを中心とした文芸の集りに漸く慰めと喜びとを見出しつゝあつた。而して又、健康の自信の増すに従つて、日頃話題に上つた魅力ある地点に、屢々遠足を実行する様なこともあつた。是もゲーテにとつて色々な意味で、多くの収獲となつたのである。其の代表的なものとして、彼は其頃試みた下エルザス及び北ロートリンゲンへの騎行を、彼の自叙伝に麗しく描写して居る。其期日は、当時の彼の生活気分の過程や心理的推移に重要な証明となるのであるが、明記されては居ない。然し彼の自叙伝の中の此騎行文⁷⁾に「数日前の夜ザール河畔で、あたりの岩や藪の間にきらめく螢の大群が飛び交うのを見た。」「山深い此処、夏の夜の明るい地平線に対し猶一層黒い森に被われた暗い大地を脚下にし、きらめく星空を頭上に頂いて、私は寂として人影のない場所に唯一人で長い間坐つて居た。」とある描写と、

1) GOETHE'S Brief an Susanna Katharina von KLETTENBERG, 26. Angst 1770.

2) STILLINGの命名.

3) LENZの命名.

4) {木村謹治著若きゲーテ研究105頁.
HEINEMANN K. GOETHE S. 88.

5) GOETHE : Aus meinem Leben 2. Teil 9. Buch.

6) GOETHE : Aus meinem Leben 3. Teil 1. Buch.

7) GOETHE : Aus meinem Leben 2. Teil 10. Buch.

又6月27日附カタリーナ・ファブリーチウス宛の彼の手紙に¹⁾「昨日僕は一日中馬を乗り回しました。夜が迫つて来て、僕達はザール河が下方の明媚な谷間を流れ行く辺り、而てロートリンゲンの山地の辺りにさしかりました。右手縁なす谷を見ると、流れは薄明の中をいと凄く静かに流れ行き、左手には、山手擲の森の黒い闇が山の方から頭上に蔽いかゝつていました。暗い岩影を廻ると、藪の中から輝く小鳥が——註。自叙伝の螢——が静に神秘的に縫い去りました。其時僕の心は此辺りに相応しく静まり、日中の煩しさは夢の様に忘れ去られて、それを記憶の中に呼び戻すさえ骨折れることでした。」とある描写とは、当時の同じ情景に関するものであることから推して、此手紙の日附の数日前のヨハネ祭(6月24日)の前後であるらしい。ハイネマンは是を1770年6月²⁾とだけ記して居り、ビイルショウスキーは「ゲーテは、1770年のヨハネ祭³⁾に下エルザス及び北ロートリンゲンへ旅行を企てた」と其著「ゲーテ」に記して居る。然るに渡辺格司教授の旧訳には1770年のヨハネ祭(6月21日)にと、特に挿註がなされている⁴⁾。茅野蕭々教授のゲョーテ研究にはハイネマンの云う所と同様に1770年6月⁵⁾とある。即ちゲーテは、1770年6月24日のヨハネ祭には、教会にはなくて、エルザス・ロートリンゲンの自然の中に居つたのである。

ゲーテは、自叙伝の中で此旅行記を「私の二人の親友で、共にエルザス生れの食卓仲間、エンゲルバツハ及びワイランドと共に、私は馬でツアーベルンに赴いた。」と言う言葉で書き出し⁶⁾、而て此騎行の二日目に、ブーフスワイレルで、友人ワイランドが親切なもてなしの用意をしてくれたことを述べている⁷⁾。又ゲーテをば、秋10月ゼーゼンハイムの牧師ブリオンの家に案内して下れるワイランドに就いても、「エルザス生れで、私の食卓仲間のワイランドは、時々近郊の友人親戚を訪問して、静かな又勤勉な日常生活の鬱を散じて居たのであるが、私が遠足に出かける時には、諸所方々の村や家庭へ親ら案内してくれたり、紹介状を書いてくれたりして、色々と私に便宜を図つてくれた⁸⁾」と説明している。此等の叙述によれば、ワイランドとエンゲルバツハは、共にエルザス生れであり、又ブーフスワイレルには、ゲーテ達を親切に款待して下れたワイランドの骨肉の何人かの家庭があつた様に窺われる。ビイルショウスキーは、其著「ゲーテ」に「ゲーテは此小さな集りの中にあつて、更に二人のエルザス人を仲間として親しくして居た。神学生ワイランドと法学生エンゲルバツハで、後者はシュトラスブルグで僅か一カ月に親しくなつたのである⁹⁾」、「ゲーテは、此の地方に親戚知己を沢山持つて居るワイランドと共に、1770年のヨハネ祭に下エルザス及び北ロートリンゲンへの旅行を企てた¹⁰⁾」。「それからブーフスワイレルでワイランドの両親がよき款待を用意して居た¹¹⁾」。と書いて、大体ゲーテの自叙伝に従い且つブーフスワイレルにワイランドの両親が居たとして居る。然るに、ハイネマンは「ゲーテは、フランクフルトの市民の息子ワイランドと共に、既に1770年6月にエンゲルバツハを同伴して、ザールブリュッテンに騎行した。そこでワイランドの義兄で、且つゼーゼンハイムのブリオン牧師夫人の兄弟である参事官シエルと知己になつた¹²⁾。」と云う注目すべき異説を伝えて居る茅野蕭々教授もハイネマンと同説を其の著「ゲエョーテ研究」に採つて居る¹³⁾たとえ記憶おぼろな晩年に書かれたゲーテの自叙伝とは言え、

1) GOETHE'S Brief an Katharina FABRICIUS ? 27. Juni 1770.

2) HEINEMANN : GOETHE S. 109.

3) BIELSCHOWSKY : GOETHE neugearbeitet von W. LINDEN S. 102.

4) ビールショウスキー著 渡辺格司譯ゲーテ評傳114頁。

5) 茅野蕭々著 ゲエョテ研究162頁。

6) GOETHE : Aus meinem Leben 2. Teil 10. Buch.

7) GOETHE : Aus meinem Leben 2. Teil 10. Buch.

8) GOETHE : Aus meinem Leben 2. Teil 10. Buch.

9) BIELSCHOWSKY : GOETHE neugearbeitet von Walter LINDEN S. 101.

10) BIELSCHOWSKY : GOETHE neugearbeitet von Walter S. 102.

12) HEINEMANN : GOETHE S. 109.

13) 茅野蕭々著 : ゲエョテ研究 137, 140, 160頁 然し WEYLANDをエルザス生れとして居る點は HEINEMANN と異なる。

彼がやがて自ら永遠化するフリーデリケの家に、而も彼の思い出美しい青春の時に、親しく彼を案内して下れた親友ワイランドの生地をば、フランクフルトからエルザスに間違えると云うことは、殊にフランクフルトが自身の生地でもある彼には、殆んどあり得ないことであろう。更に又ブーフスワイルルに於いて彼自身を款待してくれたのはワイランドの両親であり、ザールブリュッケンのそれは、彼の義兄弟の家庭であることも、到底彼にとっては忘れられないことであろう。とすれば、ゲーテの物語るところに信は置かるべきであろうか。然しながら、ハイネマンが敢えて異説をとなえて問題を今日に残す所以のものは、何等か有力な根拠をそなえたものでなければならぬ。ウオルフは此問題に直接答えては居らないが、其の著「若きゲーテ」に於いても、他の問題に就いてではあるが、「最近の研究は、二、三の事項を訂正し、古い僅かながらの書翰によつて二、三の補正を加えざるを得なかつたり」と云つて居る様なことは、我々の判断を一層慎重ならしむるものであろう。

兎に角く、ゲーテの此騎行は、彼の自叙伝に於ける美しい描写となつた程に、又前掲の6月27日附カタリーナ・フアブリーチウス宛の手紙の中の表現がグンドルフの所謂「未だ嘗て如何なるドイツ人も、自然と感情の此の階音をば奏で出した者はない²⁾。との絶讃となつた程に、思い出楽しいものであつたに相違ない。此騎行の途次にゲーテをば好意を以つて敏待したワイランドの一族の家庭を、それがワイランドの両親の家庭にせよ、或はワイランドの義兄弟シエルの家庭にせよ、ゲーテは自叙伝の中で麗しく称讃して居るのであるが、此の会遇は、ハイネマンも言つている様に、恐らくゲーテのゼーゼンハイムへの憧憬の一つの動機となつたのである。と言うのはゲーテは、ワイランドの親戚でゼーゼンハイムに聡明な夫人と二、三人の可愛い娘達と共に相当な暮しをしている田舎牧師ブリオンの家庭の様子などを、既に屢々ワイランドから聞いて、ひそかな憧れを持ち、彼の心は未だ見ぬ優しい姿に走つて行つたらしいのである。ゲーテは自叙伝中の此騎行文中の中に次の様³⁾に書いて居る。「私は寂として人気のない場所に唯一人で長い間坐つて居た。そうしてこれ程の寂寞を感じたことは、未だ嘗て一度もない様に思われた：それだから、突然二、三の角笛の音がバルサムの香の様にあたりの静寂な空気に生気を与えた時には、其意外な響きが如何に嬉しかつただらう。恰も其の時私の心の裡に優しい人の姿が浮かんで来た。其の姿は旅行中の色々な印象のために今まで意識の奥に押し込められて居たのであつたが、次第にハッキリとして来て。私を其の場所から宿へと馳り立てた。宿へ歸つた私は、早朝出発出来る様に準備を整えた。……友人を後に残して私は其の憧れに惹かれて、既に覚えていた近道を選び、ハーゲンナウを経て懐かしいゼーゼンハイムへと馬を走らせた。荒涼たる山岳地帯や又それに続く明るい豊饒な晴々とした土地の眺望も、愛すべき、魅力あるものに向けられて居た私の心の憧れを押え止めることは出来なかつた。而て此の時も亦帰路の方が往路よりも魅力ある様に思われた。何となれば、其の帰路は、私の心を寄せ且つ親愛に価する女性の近くに私をば又も導くものだつたからである」。

此処に注意すべき事は、ゲーテの此記述が、後のゲーテ研究家に一つの問題を残したことである。ウオルフは其の著「若きゲーテ」の中に「ゲーテはエルザスの旅行の途次食卓仲間のワイランドによつてゼーゼンハイムの牧師の家に案内された⁴⁾。」と過去形で書き、又「ゲーテは10月半ば少し前初めてゼーゼンハイムに来たり而て忽ちフリーデリケ・ブリオンが、彼の心と詩想とを動かし初める⁵⁾。」と現在形で書いて居る。然るに、ビールショウスキーは其の著「ゲーテ」の旧版に於いて「ゲーテは其処からライヒスホーフエン、ハーゲンナウを経て、ゼーゼンハイムの牧師の家を訪れたと言つて居るが、彼が此の記念すべき家に行つたのは数ヶ月後である⁶⁾。」と述べて居る。茅野蕭

1) WOLF : der junge GOETHE, dritte Periode, Anfang April 1770—bis End August 1771.

2) GUNDOLF : GOETHE S. 87.

3) GOETHE : Aus meinem Leben 2. Teil 10. Buch.

4) WOLF : der junge GOETHE dritte Periode

5) Anfang April 1770. bis End August 1771.

6) ビールショウスキー：渡邊格可譯ゲーテ評傳115頁。

々教授も其の著「ゲョエテ研究」に是と同一の説を書いて居るのである¹⁾。ビイルシヨウスキーの新版「ゲーテ」には、何故か此項が全く削除されてしまつて居るが、「ゲーテは1770年10月上旬にワイランドによつて其の親戚に当る牧師ブリオンの家庭に連れて行かれた²⁾」と云う項は新版にも依然として述べられて居る。此の事に関して、ゲーテの騎行の記述を注意して再び見るならば、“Auch diesmal erschien mir der Herweg reizender als der Hinweg, weil er mich wieder in die Nähe eines Frauenzimmers brachte,”と書いてあつて、此のin die Nähe³⁾の言葉は、必らずしも、其の女性に接する事を意味するものでなくても可いのである。即ち其処に多少の巨離的余地を残している場合にも用いられ得る表現である。寧ろ是は、ゲーテの憧憬が幾度か彼をして其の対象たる女性の近くに彷徨せしめたかを物語つて、読者の心に迫る巧みな表現であるとも見られる。従つて、ビイルシウスキーが旧版「ゲーテ」に於いて「ゲーテは其処からライヒスホーフエン・ハーゲナウを経て、ゼーゼンハイムの牧師の家を訪れたと言つて居るが、彼が、此の記念すべき家を訪れたのは数ヶ月の後である。」と言う項を新版“ゲーテ”に於いて全く削除したことは、却つてゲーテの真意に添うものであろう。然し、このことは、ゲーテの専門的研究家に於いてさえ、問題となつたばかりではなく、一般の読者には絶えず繰り返される問題たることに變りはないであらう。蓋しゲーテはそれ程巧みに屢々人をつづぐのである。

扱てゲーテは、エルザスの騎行の帰路、恰もゼーゼンハイムの、心の恋人に接したかの如くに読者を誘つては、突然話をそらして、読者の興味を他の方へ転じて行く。即ちゲーテは、彼女の田舎の住家へ案内する前に、彼女によつて感ぜしめられた愛と喜びとを高める為に興つて力あつた或る事情を語るのである。ゲーテがゼーゼンハイムの辺りを彷徨いつつも、やがて野バラに象徴されるフリーデリケを彼女の庭野に実際に訪れるまでには、猶お彼には迎るべく残された思想的、心理的距離があるのである。その距離にはヘルダーの思想と、ゴールドスミスウエークフィールドの牧師の家の平和と、民謡の歌声との前奏が鳴りひびいて居るのである。(未完)

1) 茅野蕭々著：ゲョエテ研究 140頁。

2) BIELSCHOWSKY : GOETHE S. 127.

3) Näheと云う言葉は Aus meinem Lebenの3. Teil 11. Buch にも用いられている。此場合は近接の意味があつても亦差支えないであらう。